家族大会 2021 報告

“こどもぴあとヤングケアラーを考える”
沖福連 家族大会 2021 のあとに

増山　幸司

職場でも SNS でもなんだかんだ言って、「家族」という立場の人よりも、「当事者」という立場の人たちのほうが、身のまわりにたくさんいる。

今回、こどもぴあやヤングケアラーについての研修会を企画したとき、「まるで障がい者が親になることを責められているみたい」だとか、「もし親になったとき、自分も同じように子どもを苦しめてしまったらと思うと、辛くなる」だとか、そういう声も自然と集まってきて、心の片隅ではそれらが常に持続低音を鳴らすことになった。

＊

相変わらず、「家族」が多くを背負わされすぎている。

社会に担いきれないことがあると、なんでもすぐ家族の責任に帰されるところがあって、それは制度として「私宅監置」が行なわれていた頃からちっとも前には進んでいない。

「個人」を扱うとき、必要ないように思えることでも、いつでも「家族」がセットにされている。生活保護の扶養照会の手続きひとつとってもそうだし、コロナの給付金を世帯主ごとに申請することもそうだし、ある人が罪を犯すとその家族までが謝罪を求められたりする理不尽からも、「身内でなんとかすることが当然」という、この国の伝統的な文化が後景にうかがえる。

こういう内面化された慣習や考え方は私たちのなかでぜんぜん変わっていないものの、一方で伝統的な家庭、伝統的な地域社会みたいなものがどれだけ残っているかはわからない。セーフティネットとしての地域共同体はとっくに機能をなくしたし、家庭では核家族化や少子化、晩婚化、ひとり親世帯の増加も進んでいる（ちなみに近年、沖縄での離婚率は全国 2 位の 45.8％で、2 組に 1 組弱のパートナーは離婚しているらしい／2018 年「人口動態調査」厚労省）。

ことほどさように家族の様態は移り変わり、ますます多様を示してきている。

コンビニや保育園や学習塾やブライダル産業やホームヘルパーやスマホやその他諸々の社会資源によって、家族機能はほぼほぼ外部化されてきたようにも感じるが、それでも「こうあるべき」という家族の呪いだけは祓われることなく、そこ・ここに気配を残している。

この呪いの正体というのは、たぶん地域共同体の残滓としての「世間の空気」である。

見えない空気に抗うことは簡単ではないはずだけれど、これの呪鎮に挑むことこそ、「大人の責任」であり、「社会の責任」でもあると個人的には考えている。

（次のページへ続く）